科学者の9割は「地球温暖化」CO_2犯人説はウソだと知っている

丸山茂徳 著

宝島社新書　648円

読み物
お薦め度
☆

何とも刺激的なタイトルが本屋の平積みで目について，思わず買ってしまった．僕もいちおう「科学者」の端くれなのだけど，ウソだとは知らんぞ……．しかし，よくよく読むと「2008年の地球惑星科学連合学会の『地球温暖化の真相』というシンポジウムで取られたアンケートによれば，21世紀が一方的に温暖化する，に賛成した人が10人に1人であった」というのが正確である．ならば，このタイトルはいくら何でもひどすぎるだろう．週刊誌の見出し並である．しかも，本文でも何カ所か「科学者の9割は，……」と書いてあるところを見ると，出版社に押し付けられたというわけではないらしい．まあ，それはともかく，第1章では，CO_2元凶説への反論として，太陽活動の変動と宇宙線による雲の発生が，気候変動の主原因であるという主張を展開している．著者の所属する東京工業大学理学流動機構で独自の温暖化予測を行った結果，現在（つまり2008年）あたりをピークに2035年に向かって地球の平均気温が減少するという，IPCC（気候変動に関する政府間パネル）の予測と全く逆の結論が得られたのだそうだ．太陽活動にはよく知られた11年周期以外にも，50–100年の長期的な変動があって，近年の急激な温暖化は，たまたま太陽活動が活発になった時期に相当するらしい．

ふーん，なるほど．なかなか面白い．観測からも，過去の気温変動と宇宙線量に相関があるらしい．ならば，気候変動に太陽活動を考慮するのも当然かもしれない．しかし，肝心の「宇宙線が雲を発生させるしくみ」(p. 29) がよくわからない．「宇宙線によって分子がイオン化し，不安定になった分子は他の分子と結合して，凝結核をつくり，水蒸気が水滴となって雲を発生させる」，としか書いていない．文章8行とポンチ絵一つだけの説明だ．これでは，このメカニズムが確立した理論なのか，単なる仮説なのか，全くわからない．仮説を立ててシミュレーションをすること自体は悪くはないが，「どのように」予測モデルに組み込んだのか，が書かれていないので，その結果がIPCC予測に比べて妥当なのかどうなのか，分野外の読者には判断できない．というような問題があるにしろ，第1章「地球温暖化CO_2犯人説のウソと寒冷化の予兆」は，啓蒙書としては十分面白い．しかし，第2章　2020年成長の限界と人類の危機，第3章　人口減少時代の日本の政策，終章　人類のバブルが崩壊する，は，本タイトルとは直接関係のない，著者の（いささか極端な）自説の展開でしかない．曰く「21世紀は人口増加と石油資源の枯渇によって，戦争の時代となるだろう」，「世界のすべての国家が民主主義国家（世界統一国家）となれば戦争はなくなる」，「世界統一国家のリーダーとなれるのはアメリカ」，「日本語は絶滅の道を歩む可能性は非常に高いので，英語教育を徹底すべし」，「日本は人口抑制政策を進めよ」，「少子化を推し進めれば社会保障制度が崩壊するかもしれないが，いたしかたない（破滅的な戦争よりはまし）」，「地方の高齢化が進んだ限界集落は，駅前に巨大ピラミッド型集合住宅を立てて，そこに引っ越してもらったらよい」「山間地域に点在している墓地は，アメリカのような農業の大規模集約化に邪魔なので，1カ所に集めたら良い」．うーむ．

第2章以降の一部の主張は，例えば，ベストセラーとなった数学者藤原正彦の「国家の品格」と対極だ．どうも科学者が科学以外のことを語ると極端に走る傾向があるようだ．著者は地球惑星科学者なのだから，第1章のみをしっかりと書いて欲しかった．

和田桂一（国立天文台　理論研究部）